

# 水辺に集まるトンボの産卵行動

## *Spawning Behavior Dragonflies Gathering at the Waterside*

岩崎行伸\*

トンボの種(蜻蛉)は、全世界に5,500種いて、そのうち200種以上が日本に棲息している。初夏から秋口まで川原・沼・遊水池の近辺の草むら等でよく観察される。トンボの幼虫であるヤゴは水田や沼・小川・遊水池等の水中で過ごすため、トンボは水がなければ子孫を残すことができない。

日本で観察される最も大きいトンボはオニヤンマで、この種は噛みつかれると痛いほど顎が強く、飛翔力の強いトンボで、同じところを行ったり来たりする習性が知られている。

ウチヤンマのみは水辺になわばりを持ち、他のみが入って来ると攻撃をしかける。弱々しく見えるのがセスジイトトンボ、この種の中でも、最も小型のトンボである。

ハグロトンボは翅が真っ黒いところから呼ばれて、河川の水辺をヒラヒラと飛翔している姿をよく観察できる。

シオカラトンボは一般的によく観察されるトンボである。腹部が黄色で麦藁色に類似しているために、ムギワラトンボと呼ばれるトンボはシオカラトンボのみである。

アキアカネは暑い真夏は高原等の涼しいところに移動し、秋には涼風が吹くようになると集団で平地に降りてくる。

初夏になると姿を観察できるトンボ。トンボは棲息している種類や数によって、その周辺の水棲環境状態が判断できる自然界のバロメータだといわれている。トンボが棲息するには、餌料となる生きものがあることである。生きものが棲息するには、水草が茂り水質もある程度澄水な状態に保たれている必要があるからである。

トンボは交尾をするとタマゴを水中や植物の莖の中に産みつける。タマゴは

水辺に集まるトンボたち



図1、水辺に集まるいトンボたち、A：オニヤンマ、B：ウチワヤンマ、C：セスジイトトンボ♂♀、D：セグロトンボ♂♀、E：シオカラトンボ♂♀、F：アキアカネ

Photo by Y. IWASAKI

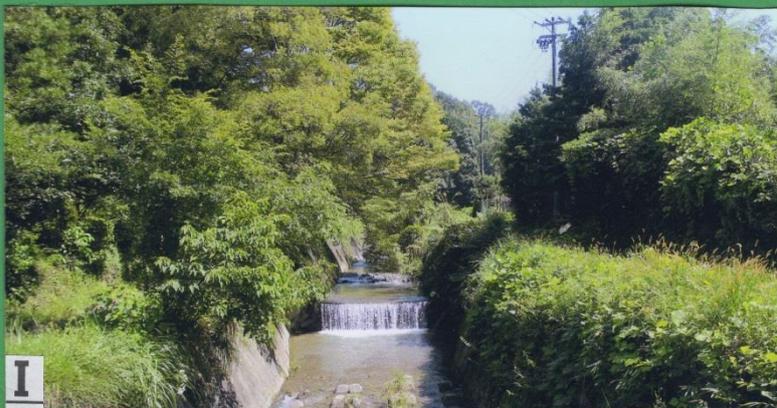
## トンボが集まる水棲環境



G



H



I

Photo by Y. IWASAKI

図2、トンボが集まる水棲環境、G：麻機湿地/静岡葵、  
H：塩田川/静岡清水、I：吉田川/静岡駿河

早ければ10日、種類によっては100日以上かけて孵化する。孵化した幼

虫は前幼虫の時期を過ごし、9～14回ほど脱皮を繰り返し、やがて羽化を迎える。

ヤゴと呼ばれる幼虫は短いもので略30日、ムカシトンボのような種類であると羽化するまでに5～8年もかかるといわれている。

時期がくると、幼虫は地上にあがるが、羽化する様式に「直立型」と「倒垂型」が知られる。「直立型」は頭部と胸を垂直にたてて、水辺の近くの石の上などで羽化、「倒垂型」は茎につかまり、頭と胸を後ろにのけ反らして羽化する方法である。

羽化したばかりのトンボは白っぽく弱々しい感じがするが、1日位過ぎると体の模様も濃くなり、翅も丈夫になって飛び立って行く。

トンボは水の中や植物の茎の中に産卵するが、種類により産卵方法が異なる。シオカラトンボ等は尻を水面にチョンチョンとつけて産卵する。アキアカネ等は空中を飛びながら水面や水辺近くの地面にタマゴを落とす。オニヤンマは水底の砂の中に、長い産卵管を突き立てて産卵する。イトトンボの仲間は水草の茎の中に産む。

---

#### 参考文献&図書

- 1) 里山図鑑(2009):(株)ポプラ社、おくやまひさし編著
- 2) 身近な昆虫のふしぎ(2012):科学書績籍編集部、海野和男著
- 3) 水辺に見られるトンボの行動生態(2012):海鳴26号、東海大学海洋・海外水産開発研究会OB会編集、岩崎行伸著

---

\*会員:自然観察塾(塾長)・水棲&環境研究